

結心会

映画「ソーゾク」通じ相続問題の認知促進
相談起点に生命保険ニーズ喚起

今秋、遺産相続をテーマとする映画「ソーゾク」が全国で劇場上映される。平凡な家庭の相続トラブルにスポットを当て、相続に関する法律や対処法を面白おかしく解説しながら家族や人生の在り方を問う社会派コメディだ。映画の制作には、一般社団法人保険健全化推進機構「結心会」が企画協力として参加した。高齢化社会の課題である相続問題の解決に寄与するとともに、映画の自主上映を通じて相続問題を広く認知させ、相続相談、生命保険販売へとつながることが狙いだ。映画公開を前に、企画を担当した(株)ベストフレイム取締役の兼田仁氏と結心会会長の上野直昭氏に、作品の意図や代理店に求められる役割などについて聞いた。

——相続をテーマとする映画「ソーゾク」の脚本を手掛けており、その経緯を通じて高齢化社会の課題の深刻さを痛感したとのこと。この中で、「介護の次の課題は相続問題だ。誰かが直面する『相続』の現実を、映画を通じてしっかりと伝えていきたい」という思いを打ち明けた。

兼田 5年ほど前に、「ソーゾク」の監督・脚本家である藤村磨実氏から「相続問題をテーマにした映画をオリジナルで制作したい」と提案されたことが始まりだ。藤村氏は以前に、介護現場における問題や人と人とのつながりの大切さなど、介護業界の裏側を描いた

人事のようである感の湧かない話であったことか、まずは書籍を読むなど相続問題について学ぶことから始めた。そのうち状況の下、監督と同郷で相続コンサルタントとして活動している梶野雅章氏と知り合い、直接話を聞く機会を得た。梶野氏から、日本には相続登記がなされずに放置された土地が九州の面積ほどあると聞き衝撃を受けたが、同時に、そこには必ず人間ドラマが存在するはずだと気付かされた。

不動産相続の事例と、それにまつわる人間模様を盛り込めば、この企画を形にできるかもしれない。そう考え、オリジナルのシナリオ開発に取り掛かることにした。しかしながら、相続問題を扱っては専門家の知見が不可欠であり、日頃から相続相談を受けている保険代理店や士業の方に話を聞く必要があった。そんな



左から、上野氏、兼田氏



10月17日(金)より劇場公開

その数カ月後には母が認知症を発症し、施設入所の準備や手続きなどの難題に直面した。

相続をはじめとする家族の問題の深刻さを身も

「この作品の制作を絶対に実現させなければ」という使命感が芽生えた。映画を通じてその現実を伝え、問題提起するため、固い決意の下に制作を再開し、このたびついに映画が完成した。

——企画協力の同意した理由は。

上野 全国各地の保険ショップの集合体である

「代理店を社会課題解決のプラットフォームに」

ゲットが絞られてしまうため、正直なところ難しさも感じていた。

そんな中、父が誤嚥性肺炎で入院し、院内感染によって新型コロナウイルス感染症に罹患してしまい急逝した。親族とは疎遠になっており誰に連絡すればいいのか分からず、父の財産やその所在を全く把握できない状況で、大きな困難を経験した。

告知手段の一つとして、6年ほど前から落語を活用した取り組みを展開していたが、認知をさらに拡大させるために

は、より効果的なアプローチが必要だと感じ、要だと感じてきた。そのよう

を自身の経験をもとに広く発信し、相続の現実や「実家じまい」の重要性を訴えている松本明子さんを起用するなど、キャスティングにもこだわったと聞いている。大塚寧々さんをはじめ多くの実力俳優が出演している作品なので、幅広い層の方に興味をもって見てもらえると思う。

来年の2月ごろからは自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

自主上映やプラットフォーム配信が可能になるので、各地の代理店に公民館や地域のホールなどで

マーケットの拡大を見据え、すでに相続専門の社団法人の設立や、相続問題の啓発を目的とした書籍の執筆、相続問題の認知拡大に向けた葬儀業者との協業などに取り組んでいる。また、葬儀業者以外にも、不動産業者や墓地管理業者など相続マーケットへの参入を狙う事業者は増えている。これらの事業者と連携しながら映画を上映することによって、二重喚起および市場拡大を一層加速させていきたい。

——相続をはじめ多くの高齢化課題が存在する中で、代理店に求められる役割とは。

上野 その昔、「ニッセイのおばちゃん」自転車で笑顔をほこるふりさとよというテレビCMがあったが、このCMに象徴されるように、ふるさとを支えることは保険のプロである代理店の社会的役割だと考えている。地域に根ざした代理店が相談相手になるれば、相続をはじめとする高齢化課題の解決につながるはずだ。今こそ原点に立ち返り、「地域を支えるのは保険の人」という認識を再び社会に広げていきたい。保代協や結心会の会員、認定代理店のように高い信頼と体制を備えた代理店ならば、きつとその役割を果たせるだろう。結心会は、各地で根を張る代理

店が集合体として、高齢化に伴う社会課題が山積する地方において、高齢化問題解決のプラットフォームとなることを目指していく。

——最後に代理店に向けてメッセージを。

兼田 相続は介護とは異なり、相手がすでにいない中で向き合う問題であり、残された者が当人の「想い」を受け取るには、事前の対話や準備が欠かせない。日本に根付く「見て見ぬふり」の文化や家族間の対話の希薄さが相続問題を深刻化させている。この映画を通じて、家族の絆や向き合うことの大切さを見つめ直すきっかけにしてほしいというのが作手としての願いだ。今回は不動産相続を主題としているが、より多様でリアルな事例を映像化し広く届けていく企画も進行中なので、代理店の皆さまには、啓発の一助として作品を活用してもらえればありがたい。

上野 社会課題を解決する存在として代理店がある。災害対策や高齢化問題といった社会課題の解決を保障の力で支えていくために、まずは相続問題の認知促進に向け一丸となつて映画「ソーゾク」の活用に取り組んでもらいたい。

◇ 映画「ソーゾク」の概要は以下の通り。
▽脚本・監督：藤村磨実
▽製作：(株)ふれぼり
▽配給：(株)ベストフレイム
▽出演：大塚寧々、中山忍、有森也実、松本明子ほか
▽劇場公開：10月17日(金)より、ヒューマン・トラストシネマ有楽町、シネ・リーブル池袋ほかにて全国順次公開
▽ストーリー：高齢の母の死をきっかけに、仲の良かった鈴木家の兄弟姉妹が遺産分割を巡って対立し始める。実家の処分を望む姉たちと、「跡継ぎ」を主張する弟夫婦、さらに亡き長男の妻も加わり、話はこじれて相続トラブル勃発。後から見つかった遺言書にまで文句を言いはじめ、ついには裁判沙汰に。家族の絆とは一体？数百万円のお金でこじれてしまう人間関係は滑稽？戸籍に縛られた日本人特有の相続トラブルは悲劇？それとも喜劇？

▽監督コメント：「相続」はちょっとしたことで「争族」になってしまう。この映画を観た人が「相続」を自分の問題として考え、あれこれ語り合わずにいらねえかなるようになりたい。そのために散りばめたいいくつかのクエスチョンと、それに対する答えが家族との向き合い方を導き出すに違いありません」